

子宮頸がん

「勇気持って中止を」

ワクチン 部会傍聴席で憤り

子宮頸がんは、約百種類あるヒトパピローマウイルス（HPV）のうち十五種類が原因となつて発病するとされる。

そのうち現在使用されている二社のワクチンは、子宮頸がん全体の50〜70%を引き起こす二種類に効果があるとされる。残る種類のウイルスによるがんは防げない。

ワクチン接種の有無にかかわらず、定期的な検診は不可欠。厚生省も「早期に見れば、治癒率はおおむね100%」と認め

「保護者の声を聴いてください」「また被害者が出ますよ」。現時点でワクチンの定期接種の一時中止は必要ないとする厚労省の専門部会に、傍聴席の被害者家族たちからは悲痛な声が上がった。

（3面参照）

被害者連絡会」。連絡会は、ワクチンを接種した子どもたちに激しい痛みやしびれ、全身の脱毛など重篤な被害が出ていると訴え、原因や被害の実態が分かるまで接種を一時中止してほしいと望んでいた。

門部会では「医学的なデータに欠ける。論拠なく中止にはできない」「集中多発していないなら、中止は全体の不利益になる」という意見が相次いだ。接種後に高校二年の長女（26）が免疫性の難病になつた福島県の父親（40）は「勇気を持つて止めてほしかった。今日、この時間にも被

害が増える。無責任さを感じた。うちの娘のよつな被害をこれ以上増やしたくない」と目を赤くした。連絡会代表の松藤美香さん（40）は「これだけの副作用が起きていくのに『さらに様子をみて症例を集めよう』という発言は、理解に苦しむ。人体実験にはかならず、怒り心頭で

全国の被害者家族や支援者らでつくる「全国子宮頸がんワクチン

省に提供。しかし、専

門部会では「医学的な

目を赤くした。連絡会

認め